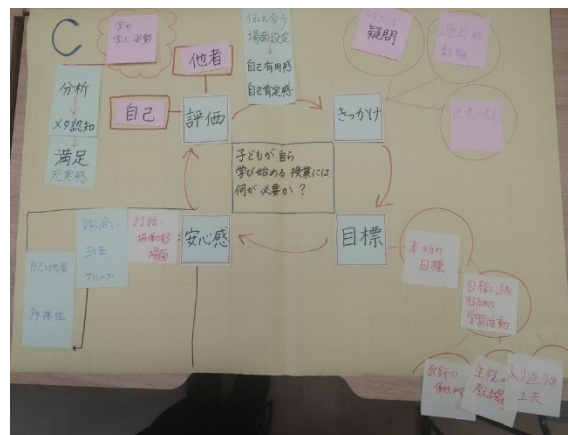


「子どもが自ら学びはじめる授業づくり」

- 1 日時 令和8年9月8日（火） 13時50分～16時45分
2 場所 美鈴が丘中学校 図書室
3 講師 英語“わくわく授業”研究所
代表 中嶋 洋一 様

4 内容

【「探究コーラルマップ」を活用し、
「子どもたちが自ら学び始める授業づくり」
をテーマに4分間のプレゼンテーション】
⇒各グループからのコメント、相互評価の数値、
コメントおよび講師メッセージをもとに本研修
のまとめを作成



C グループのマップ

5 自律的学習者を育てる5つの要素と授業づくりのポイント

【「子どもが自ら学び始める授業」の定義】

教師から次の指示を受けなくても、自分に必要なことを判断し、人・もの・情報に自ら働きかけながら、学び方を選び、必要に応じて修正している状態。

【自律的学習者を育てる5つの要素】

1 目的（必要感）

教師の「次は～しなさい」を待っていないこと

⇒最も避けたいのは指示の多さであり、それが指示待ちの集団を育ててしまう。

2 現在地（メタ認知）

ワークシートの空欄を埋めることが学習になっていないこと

⇒必要ならメモを取る、図にする、教科書に戻るなど、子ども自身が判断し学習の痕跡をつくっている。ワークシートが子どもの思考を代行していないことが重要。

3 選択肢（自己決定）

教師から与えられた方法だけでなく、子ども自身が学び方を選択し決定できる場があること。

4 他者（協働）

自分から仲間を使う

⇒「ペアで相談しなさい」と言われなくても、「ちょっと見せて」「どうしてそう考えたの?」「それ、私とは違う」と、必要が生じたときに他者とつながる（個別最適な学びと協働的な学びの往還）

5 再構築（自己調整）

一度決めた方法に固執しない / 「答え」ではなく「つけたい力」に向かっている

⇒よりよいものを求めて自己調整する。教師の求める答え合わせよりも、納得性や最適解を追求する。

6 各グループのプレゼンテーションへのコメント等

【A グループ：4つの視点 **イメージ** **自分ごと** **中間評価**（メタ認知を付けるため） **ふりかえり**】

- 言葉のチョイスや話の区切りが素晴らしく、聞き手に配慮したプレゼンテーションであった。
- 結論まで明確で、工夫や一貫性が感じられ分かりやすかった。
- ナンバリングや見出しの使い方が効果的で、流れが美しかった。
- 授業全体のつながりがあり、説明に説得力があった。
- 中間評価（4つの様子）がストーリーとしてつながっており、具体的なイメージが湧いた（「イメージができると自走する」「火がつく」）。
- 中間評価の具体的な取り組みは「すぐにみんなで実践したい」と思える内容であった。
- 具体的な例や語りかける工夫により、学びを深める力や「自分ごと化」の大切さを再認識できた。

【B グループ】4つの視点 **協働** **楽しい** **安心** **見直し**

- 時間的制約に関する視点や問いかけが多く、聞き手を巻き込む工夫があった。
- 最初に狙いを伝えることでテンポが良く、話のイメージを持ちやすかった。
- 根拠を持った説明や、成功体験が続く流れを重視した語りが良かった。
- 具体的な場面設定や、教科等横断的・総合的な学習の視点を取り入れた内容であった。
- 児童の実態（1・2年生の実態など）を例に挙げ、目的意識を持たせるポイントが明確だった。
- 将来のイメージに寄り添った内容や、学校の実態・アンケート結果を踏まえた提案であった。
- 最終的に授業での成果や姿まで丁寧に説明されており、理解しやすかった。

【C グループ】 4つの視点 **評価** **きっかけ** **目標** **安心感**

- プレゼンテーション用紙や図・ポスター・風船などの視覚的提示に工夫があり、非常に見やすく納得感があった。
- 言葉が洗練されており、すべてのトピックにおいて根拠を示して説明できていた。
- 最後のまとめ（4つの視点、4つのキーワードの循環）が重厚かつスムーズに組み合わせられていた。
- 「他者評価」「学びのサイクル」のイメージが付きやすく、言葉や図示・説明のつながりが見事だった。研究テーマに沿った素晴らしい内容で、きっかけ作りの大切さを再認識させられた。
- 平易で練られた言葉遣いにより、内容が頭に入りやすかった。

【D グループ】4つの視点：**生徒が好きなこと・興味があること** **やることを明確にすること**
自分で選択できること **人とかわりあうこと**

- 「〇〇こそ」といった強調表現が効果的で、説得力と分かりやすさがあった。デザイン性が高く、多角的な視点からの話が一つにつながっていた。
- 児童の実態や普段の授業実践に即した内容で、関連性が明確だった。
- 実践から見えてくる「サイクル」や関わりの大切さに強い共感が得られた（「〇〇先生のサイクルを実践したい」との声あり）。
- 選択肢の精選や評価研究、自己選択の場面を作る工夫など、実現可能性を感じさせる提案だった。
- 「自分ごとにするためにどうするか」というメッセージがしっかりと伝わった。

【E グループ】：4つの視点 **振り返り** **協働的な学び** **環境・週間** **設定**

- プレゼンテーションの手順・流れ・結論までのプロセスが非常に論理的でわかりやすかった。
- 一人ひとりが主語を明確にして話し、自分の言葉で伝えている姿勢が良かった。
- 「わからないから始まって良い」という心理的安全性や共感を大切にしたい現実的な内容だった。
- 雰囲気良く、グループ内での一体感や対話の温かさが伝わってきた。
- 各要素のつながりが意識されており、すぐに教室で取り組める実践的な提案であった。

7 各グループの強み

A グループの強み

○伝わりやすい構成と、順序立てた話の流れ

⇒話の組み立てや言葉選びが工夫されており、聞いている人が内容を理解しやすく、「自分もやってみたい」と思わせる伝え方になっている。

B グループの強み

○子どもたちの様子や学校のデータに合わせた提案

⇒「実現の可能性」の評価の高さが示すように、実際のクラスの様子やアンケート結果をもとにしているため、すぐに教室で使える内容になっている。

C グループの強み

○理由（根拠）の示し方、図や資料を使ったわかりやすさ

⇒すべての項目でとても高い評価となっており、理由をしっかりと示しながら、図やポスターを使って仕組みをきれいにまとめる工夫ができています。

D グループの強み

○いつもの授業や子どもたちの実態とのつながり

⇒日頃の授業での取り組みや子どもたちの姿に深く関わっており、実践の手順や工夫のつながりがはっきりと示されている。

E グループの強み

○話しやすい雰囲気づくりと、筋道の通った説明

⇒「だれが」という主語をはっきりさせたり、発言しやすい空気をつくったりしながら、結論までの手順や考えをきれいに整理して説明できている。

8 今後の取り組みに向けて

今回の研修では、思考ツール「探究コーラルマップ」を使い、仲間との対話を通じて自身の考えを更新していく体験をしました。現在、文部科学省が示している次期学習指導要領に向けた重要キーワードに「実装」があります。

「**実装**」とは、単に「ツールを使った」「ペア活動を入れた」という教師側の手立て（形式）を指すものではありません。重要なのは、「その活動によって学習者の内面に何が起きたか」です。

・教師の「させたか」から、子どもの「何が起きたか」へ

⇒授業の前と後で、子どもの何が変わったのか。仲間とのやり取りを通して何に気づき、考えがどう揺さぶられ、どのように新しい考えへと更新されたかを見つめます。

・学び方そのものの実装

⇒子ども自身が自ら考え、仲間との違いに出会い、自分の考えを深め・更新していく「学びのサイクル」を教室で再現します。

・教室での実践へ

⇒研修で先生方自身が体験した「自分で考え、仲間とつながり、心が動いて自分に戻る」という学びのプロセスを、今度は子どもたちへ返していきましょう。

ツールを使うこと自体が目的ではありません。「子どもが、授業の前とは少し違う自分になって教室を出ていく」そんな授業デザインを、一歩ずつ実践していきましょう。

9 おわりに

今回の研修における先生方の生き生きとした議論と素晴らしいプレゼンテーションを拝見し、先生方が日頃から教室で積み重ねておられる丁寧な実践・工夫が、まさにそのまま発揮された研修でした。先生方が語られた言葉や工夫の背景には、普段目の前の子どもたちと真摯に向き合っているからこそ現場で培われた知恵があります。自分たちの取り組みに大きな自信をもって、これからの授業づくりを進めてください。

また、私たちの実践の大切なよりどころとなるのが「学習指導要領」です。今回の研修で得た「子どもの内面に何が起きたかをみること」「学び方の実装（学びを実際の授業につなげること）」をこれからも大切にしていきたいと思います。

そのためにも、ぜひもう一度、学習指導要領を読み返してみてください。学習指導要領に書かれている背景やねらいをしっかりと理解して授業をつくることで、皆さん方の日々の実践はより確かなものとなり、子どもたちにとって魅力的な学びにつながっていきます。

子どもたちが「自ら学びはじめる」姿を目指し、全教職員で力を合わせて一歩ずつ歩みを進めていきましょう。